**茶室 「理覚庵」**

竹の柵と丁寧に手入れされた生け垣によって庭から隔てられた伝統的な茶室は、寺院の敷地の北西の角にある小さなエリアを占めています。

かつてこの場所に建っていた寺にちなんで、理覚庵と名付けられた茶室は、実光院の元住職の要請で建設されました。職人は周囲の山から取られた木々や、ヒノキの幹を建物の主要な支柱に使っています。

茶室での伝統的な礼儀として、客が入室するときは、誰もが前かがみになり、武士であればかさばる刀剣を持ち込ませないよう、意図的に小さく設計された引き戸を通ります。実光院の立地が郊外であることを考慮して、建物の外側に、庭園や農具を置いておくことができるフックが組み込まれています。

内部の床は畳敷きで、小さな炉が設けられています。「床の間」には、「生け花」の上方に巻物が掛けられています。どちらも季節に合わせて取り替えられます。

茶道は、禅宗の影響を強く受けています。「茶の湯」や「茶道」の様式は「お点前」と言われ、香りを楽しむ「香道」や花を飾る「華道」とならび、日本の3大古典芸術と位置付けられています。

茶室は正式な茶道の行事で年に数回使用されていますが、これらの儀式は招待制で、一般には公開されていません。